

今月のみことば

2015年8月

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」

(コリント人への手紙第二 5章17節)



1998年の長野オリンピックで来日し、聖火ランナーとして走ったアメリカ人がいた。ルイス・ザンペリーニ氏(81)である。1936年のベルリンオリンピックにアメリカ代表として出場、五千メートル走に出場し、記録は8位ながらも、ラストスパートで何人も追い抜き、米国人を感動させた。



その後、太平洋戦争勃発にともない、アメリカ陸軍航空隊に入隊した。ところが、彼の乗った飛行機が故障のため太平洋上に不時着。47日間漂流した末、日本海軍の捕虜となり、大森と直江津の捕虜収容所に入れられた。

そこで待っていたのは「バード」と呼ばれて捕虜から恐れられていた日本人軍曹からの執拗な虐待であった。

長い戦争が終わり、収容所生活が終わっても、日本兵、特に「バード」への憎しみは消えることがなかった。悪夢にう

なされ、酒浸りの日々が続き、結婚生活も崩壊寸前だった。そんな時、妻からの願いでビリー・グラハムの野外伝道集会に参加する。聖書のことばにはじめは反感と怒りを感じ、もう二度と行くまい、と誓うが、翌日、もう一度だけ、と妻にせがまれ、義務的な思いから参加する。

しかし、それが神の時だった。グラハムが語る聖書のことばはまさに自分に語りかける神のことばであった。「あなたの敵を愛せよ」…。トラウマを乗り越えるためにはもう一度日本に行かなければならない…。1950年、戦犯が収容されている巣鴨プリズンを訪ねる。しかしA級戦犯として全国に指名手配された「バード」は訴追を逃れるため逃亡していた。ルイスは拍子抜けするものの、気がついてみるとあれほどの憎しみが消えていた。ルイスにとっての長い戦争がやっと終わったのである。



GHQの占領統治が終わり、訴追の可能性がなくなってから「バード」は再び姿を表し実業界で成功を収める。長野五輪の前年、米CBSのインタビューに応じたものの、ルイスとの面会は拒み続け、死ぬまで自らの非を認めることはなかった。一方、ルイスは、かつて捕虜収容所のあった直江津を走り、沿道から盛んな声援を受け、日米友好の架け橋となった。

数年前、ルイス・ザンペリーニの生涯が書物となり、全米に衝撃と感動を与えた。どちらが人生の勝利者となったかは言うまでもないだろう。